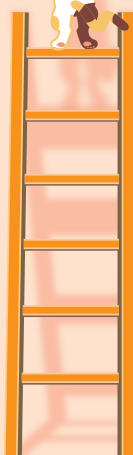


第 29 次



A photograph showing two workers in blue uniforms and hard hats excavating the Maruoka ruins. They are using tools to clear debris from a trench. The ground is muddy and covered with broken pottery and wooden fragments.



松本城三の丸

史跡松本城
南外堀第5次



史跡弘法山
古墳第4次



南栗遺跡



会場▶ Mウイング 6階 ホール

速報展のご案内



報告会で登場した
遺物を見に行こう！

令和5年 **2月11日**  **26日** 



開館時間：午前9時 ▶ 午後5時（入館は午後4時30分まで） 休館日：月曜日

会場 松本市時計博物館 3階 企画展示室 松本市中央1丁目21番15

入館料 大人 310 円 / 小中学生 150 円（通常観覧料）



YouTube でのオンライン配信

——— 報告会の内容を編集した動画を
2月下旬頃に配信いたします。

——— レジューメのデータは、松本市 HP より
ダウンロードいただけます（2月下旬頃）。

YouTube
松本市公式チャンネル



レジューメダウンロード



文化財課 Facebook



文化財課 Instagram



松本市立考古博物館 HP



SNS、ホームページで最新情報をチェック !!

発掘された松本 2022

～松本市遺跡発掘報告会～

次第

令和5年2月11日（土・祝）

司会 文化財課長 竹原 学

13：00 開会

挨拶 松本市教育長 伊佐治 裕子

13：05 趣旨説明・令和4年発掘調査の概要 2ページ
(10分) 文化財課 係長 百瀬 耕司

13：15 報告① 出川南遺跡 第29次発掘調査 6
(20分) ～古墳時代の大集落の空白地帯を確認～
文化財課 伊藤 蔵之介

13：35 報告② 松本城三の丸跡 土居尻 第15・16次発掘調査 13
(30分) ～中世の祭祀と近世の暮らし～
文化財課 原田 健司

14：05 報告③ 史跡松本城 南外堀 第5次発掘調査 21
(25分) ～南外堀初めての横断調査～
文化財課 栗津原 準也

14：30 休憩（10分間）

14：40 報告④ 史跡弘法山古墳 第4次発掘調査 27
(25分) ～3世紀のまつもとの王墓を探る～
文化財課 小山 奈津実

15：05 報告⑤ 南栗遺跡 発掘調査 33
(40分) ～37年ぶりの大規模発掘で探る奈良井川西部の古代集落～
長野県埋蔵文化財センター 河西 克造

15：45 質問
(15分)

16：00 閉会

令和4年の調査地点

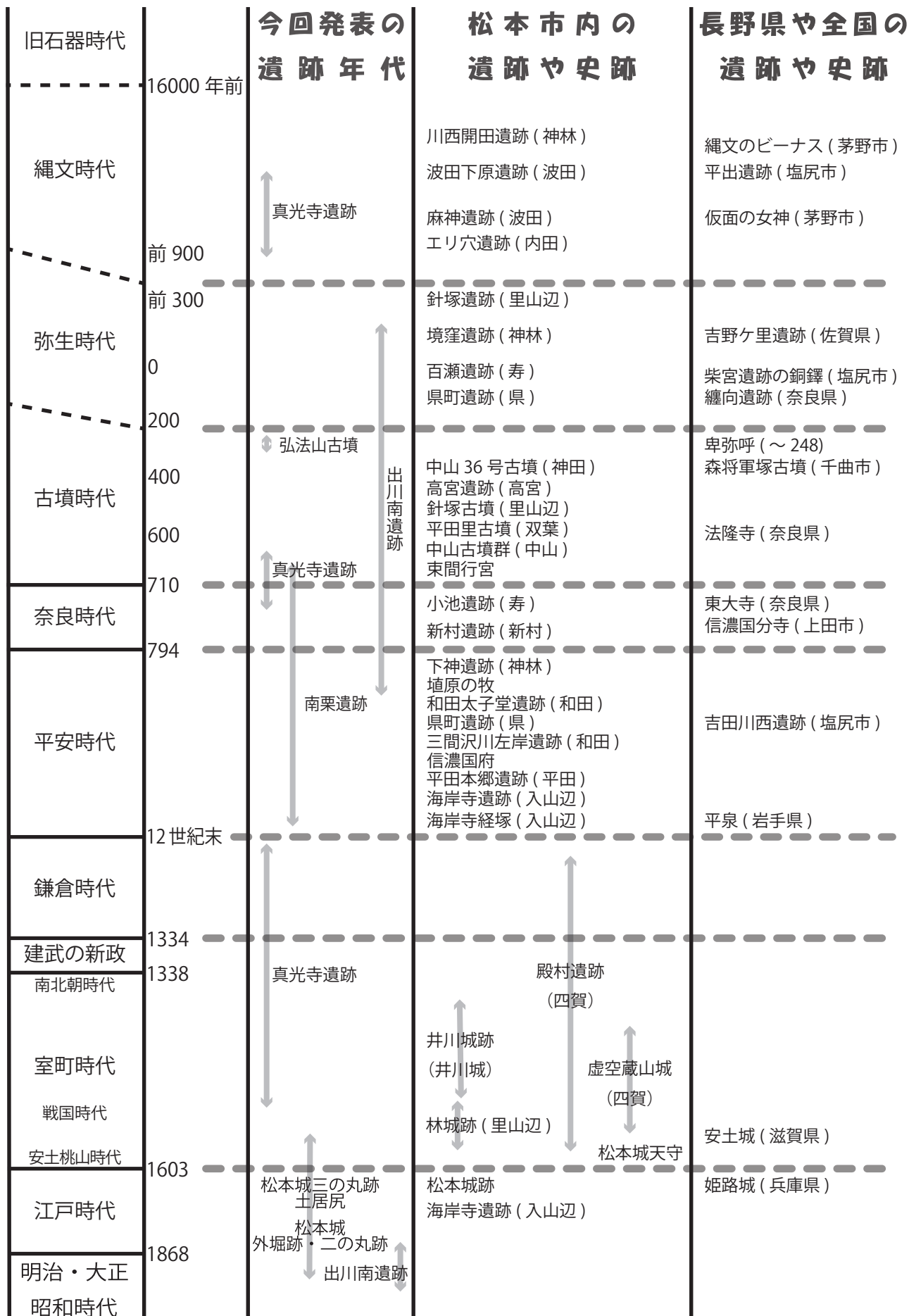


令和4年（2022年） 埋蔵文化財発掘調査・整理報告書刊行一覧表

令和5年2月1日現在

No.	遺跡・調査名	調査期間	調査面積	調査原因	時代	特徴・備考
1	シンヨウジ 真光寺遺跡	R4.4～12	6,500㎡	松本波田道路改築事業	古墳時代・中世	古墳・埋葬施設
2	ミナミクリ 南栗遺跡	R4.5～12	6,000㎡	松本波田道路改築事業	古代	集落跡
3	史跡松本城二の丸第9次	R4.11～R5.1	77㎡	遺構確認調査	近世	城館跡
4	ヨウボウヤマコフン 史跡弘法山古墳第4次	R4.6～R5.3	80㎡	史跡弘法山古墳再整備事業	古墳時代	古墳
5	イデガワミナミ 出川南遺跡第29次	R4.7～R5.1	290㎡	県道改良事業	古墳時代～近現代	集落跡
6	史跡松本城南外堀第5次	R4.6～12	352㎡	史跡松本城南・西外堀整備事業	近世	外堀
7	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第14次	R3.9～R4.5	769㎡	都市計画道路（内環状北線）建設事業	中世～近代	武家屋敷
8	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第15次	R3.12～8	400㎡	松本城南・西外堀復元事業代替地	中世・近世	総堀・武家屋敷
9	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第16次	R4.7～R5.1	800㎡	都市計画道路（内環状北線）建設事業	中世・近世	武家屋敷
10	市内遺跡確認調査	通年	—	試掘・確認調査 （試掘詳細は次ページ）	各時代	試掘
11	アガタマチ 県町遺跡第22次 （整理作業、報告書刊行）	通年	—	民間による土地利用	弥生時代～中世	集落跡
12	アガタマチ 県町遺跡第16・17次 （整理作業）	通年	—	保育園建設事業ほか	弥生時代・古代	集落跡
13	サンノマルアト ダイミョウチョウ 松本城三の丸跡大名町第3次 （整理作業）	通年	—	基幹博物館整備事業	古代～近世	武家屋敷
14	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第9次 （整理作業）	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	中世・近世	武家屋敷
15	サンノマルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第11次 （整理作業）	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	中世・近世	武家屋敷

開発工事等による市内遺跡試掘確認調査一覧（令和4年）										
No.	事業者	所在地	原因事業	調査面積(m ²)	遺跡との関係		遺構等の有無	検出遺構・遺物	備考	期間
1	松本市	丸の内	喫煙所設置	2.00	松本城跡（二の丸作事所跡）	該当	なし			1月17日
2	民間	寿小赤	店舗	5.00	小池	該当	なし			1月18日
3	民間	村井町南2丁目	造成	60.00	高畑・村井	該当	なし			2月7～9日
4	民間	小屋北1丁目	事務所	28.00	小原	該当	なし			2月22日
5	民間	沢村2丁目	集合住宅	28.00	旧射的場西	該当	なし			2月28日
6	民間	島立	個人住宅	1.50	北栗	該当	なし			2月28日
7	民間	波田	個人住宅	9.00	鼠海渡	該当	なし			3月28日
8	民間	横田4丁目	集合住宅	9.00	大村塚田	該当	なし			5月6、11日
9	民間	大村	宅地造成	20.00	大村立石	該当	なし			5月12日
10	民間	島内	宅地造成	5.40	平瀬	該当	なし			5月26日
11	民間	寿小赤	集合住宅	14.50	小池	該当	なし			6月10日
12	民間	和田	集会所	5.95	下和田	該当	なし			6月24日
13	民間	新村	個人住宅	5.25	新村	該当	なし			7月7日
14	民間	大村	宅地造成	9.00	大村立石	該当	なし			7月13日
15	民間	島内	集合住宅	13.96	島内南中	該当	なし			7月28日
16	長野県	笹賀	道路改良	3.00	神戸	該当	なし			8月15日
17	民間	筑摩2丁目	宅地造成	4.80	筑摩	該当	なし			8月18日
18	民間	奈川	設備設置	7.72	渚の尻	該当	なし			8月25日
19	民間	大村	集合住宅	9.00	大輔原	該当	なし			8月29日
20	民間	沢村3丁目	集合住宅	32.25	狐塚	該当	なし			9月8、9日
21	民間	神田1丁目	集合住宅	15.45	神田	該当	なし			9月20、21日
22	民間	神田1丁目	個人住宅	4.60	神田	該当	あり	須恵器片	記録保存	9月30日
23	民間	里山辺	宅地造成	9.00	里山辺下原	近接	なし			3年12月9日、9月30日
24	民間	県1丁目	庭園	3.64	県町	該当	なし			10月11日
25	松本市	丸の内	道路改良	8.00	松本城跡（西総堀）	該当	なし	時代不明整地層	記録保存	10月11日
26	民間	島立	個人住宅	3.06	新村・島立条里的遺構	該当	なし			10月13日
27	長野県	県2丁目	設備改修	2.50	県町	該当	なし			10月14日
28	民間	岡田下岡田	宅地造成	47.60	岡田神社裏、岡田堀ノ内	該当	あり	土師器片（流入）	記録保存	10月26、27日
29	民間	岡田町	宅地造成	11.26	下出口	該当	なし			12月1日
30	松本市	里山辺	道路関連	18.80	北河原屋敷古墳	近接	なし			12月8日





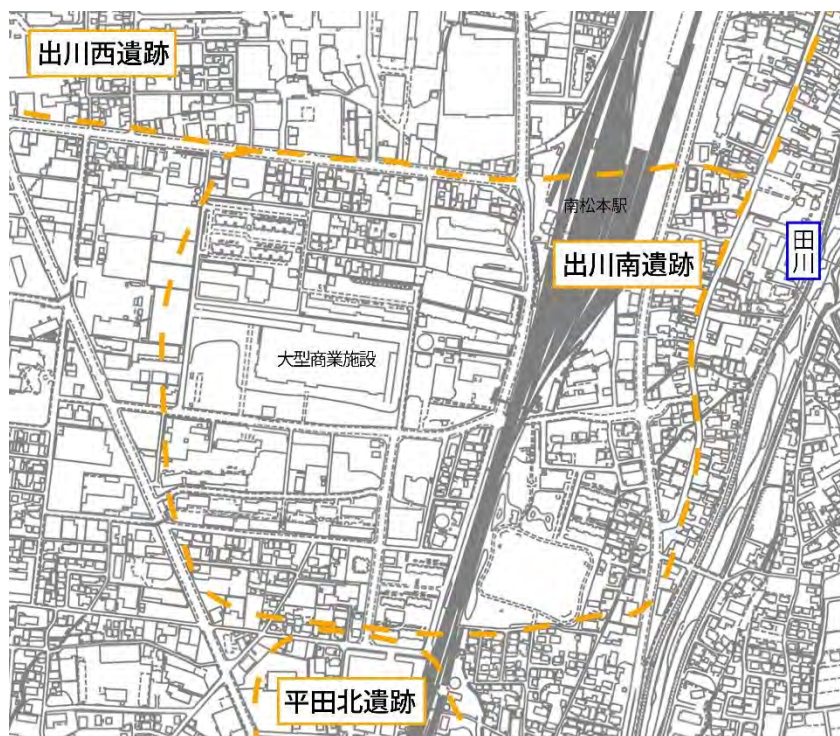
1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：松本市芳野
- (2) 調査原因：都市計画道路出川双葉線改良事業
- (3) 調査期間：令和4年7月1日～令和5年1月23日
- (4) 調査面積：約290㎡
- (5) 主な遺構：近代の人工流路
- (6) 主な遺物：須恵器、近代陶磁器



2 遺跡の概要

出川南遺跡は、南松本駅周辺から南西に広がる広い遺跡です。これまでの28回にわたる調査で、古墳時代を中心に600軒以上の住居跡が見つかった大集落の跡です。また第4次調査では、松本平で数少ない埴輪が置かれていた古墳も見つかっています。



出川南遺跡周辺の主な遺跡

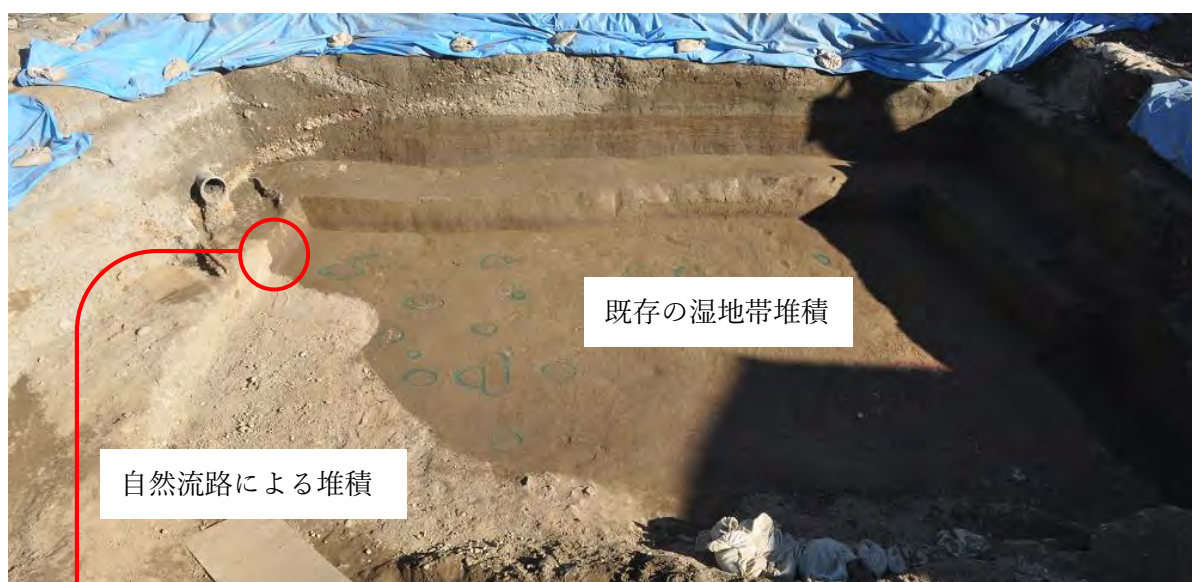
この遺跡の北側には出川西遺跡が、南側には平田北遺跡がそれぞれ連なっており、田川左岸のこの一帯は、弥生時代から古代・中世にかけて集落が営まれていました。また、この遺跡の東約 1 km には東日本最古級の前方後方墳である史跡弘法山古墳が存在し、同古墳との関連を示す、東海地方の特色を持った土器が、過去の調査で出土しています。松本平の古墳時代を考えるうえで重要な遺跡であるといえます。

今回の調査地は遺跡の中央部分の調査でしたが、人が生活した痕跡を確認することはできませんでした。この理由は、調査地周辺がかつて湿地帯だったこと、調査地内を南西から北東に流れた大規模な自然流路が存在したことが理由だと考えられます。また今回見つかった近代の溝の跡は、現在も近くを流れている穴田川が、昭和戦前期の工業用地造成の際に地下水路化される前の姿であると考えられます。

3 調査成果

(1) 自然流路の跡

A区東では、既存の堆積層を削る自然流路の東岸を発見しました。南西から北東に向かっている様子が分かります。規模は不明ですが、調査区の西端まで続いているので、かなり広い幅の川であったようです。石を調べたところ、奈良井川系統のものであることが分かりました。東側にある湿地帯堆積の土層を削って流れていました。



検出された自然流路の東岸（西から撮影）



発見された自然流路は、湿地帯堆積の土層を削って流れていたようです。左の写真は調査区の北壁で確認したもので、元々存在した右側の堆積層をえぐるように流れていた様子が分かります。とはいえ、流路の中には大きな石が少ないので、土石流のように激しい流れではなかったと考えられます。



A 区西端部の堆積状況（調査区南壁）

南西から北東に向かって流れるこの自然流路は調査区の西の端まで広がっており、砂礫層と砂層が交互に堆積していました。



自然流路の中からは、若干ですが左写真のように古代の遺物（須恵器）が出土しました。流路の上流方向で古代の遺構が見つかったので、そこから流れてきたものかもしれません。今回の調査区からは住居址などは見つかっておらず、このように流路内からのみ、若干の遺物がありました。

(2) 湿地帯の痕跡



土層堆積状況（調査区東壁）

自然流路の東側には、左ページに示したような土層が堆積していました。濃い茶色に見える部分は植物が腐食して堆積したものとみられます。そのほかの薄い色の層は、細かい砂が堆積したもので、交互に堆積しています。いずれも非常に緩やかな流れの湿地帯であったことを示しているのです、この辺りは人が住める環境ではなかったと推測できます。

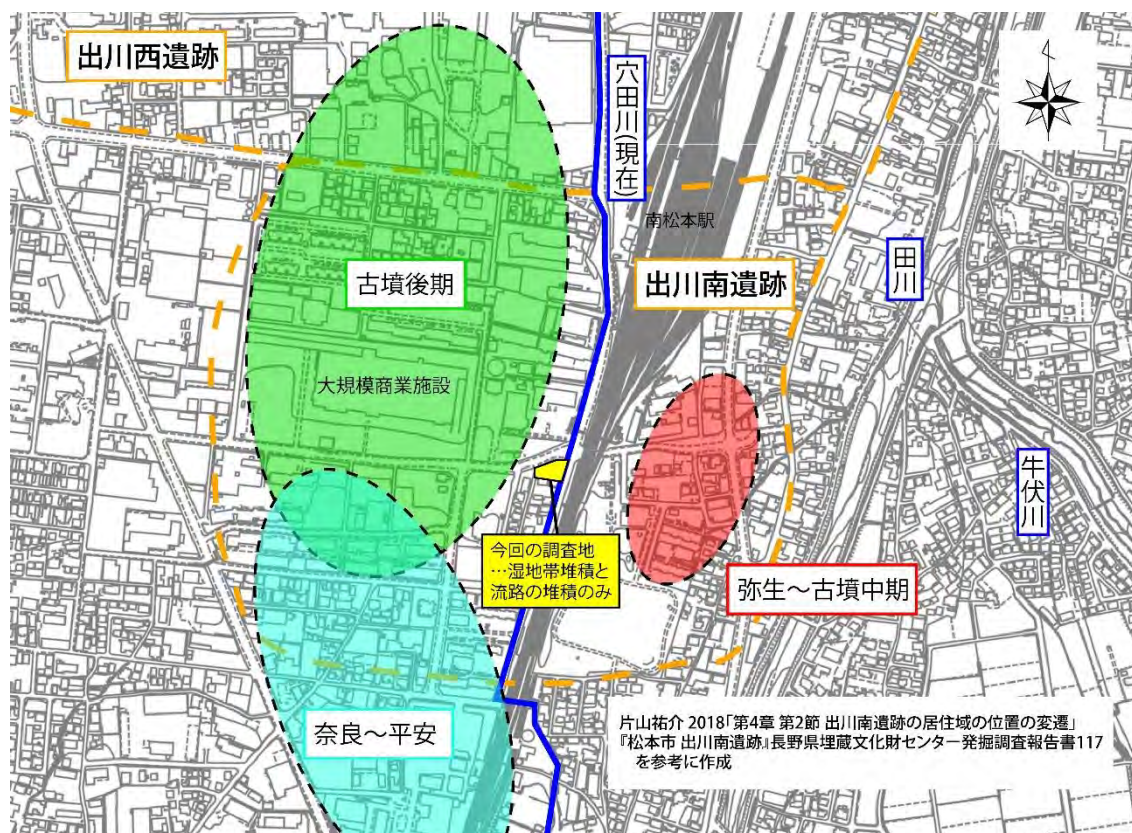
(3) 調査のまとめその1 古墳時代の大集落の空白地帯であることが分かりました

出川南遺跡では現在までに行われたほぼすべての調査で、古墳時代を中心とした数多くの住居址などがみつかっています。代表的なものを以下に挙げます。

- (1) 調査地の東側（線路の東側）…代表的な調査は第23次調査（平成25年度）
 - ア 古墳時代前期の集落跡…3世紀後半～4世紀の住居跡を確認
 - イ 弘法山古墳との関連…弘法山古墳出土の土器と類似（東海系）
- (2) 調査地の西側（現在は大規模商業施設）…代表的な調査は第4次調査（平成3年度）
 - ア 古墳時代後期の大集落…100軒以上の住居跡を確認
 - イ 古墳時代中期の古墳…松本平では数少ない埴輪が出土した平田里古墳を発見

それに対して、今回の調査では生活の痕跡がほとんど見つかりませんでした。そのかわり、次のようなことが分かりました。

- (1) 非常に緩やかな水の流れによって生成された湿地帯の存在
- (2) 南西から北東に向かって流れたとみられる大規模な自然流路の存在
- (3) これらが理由となって、調査地周辺は古墳時代の大規模集落の中心地であるにもかかわらず、人の住めない場所になっていたと考えられること

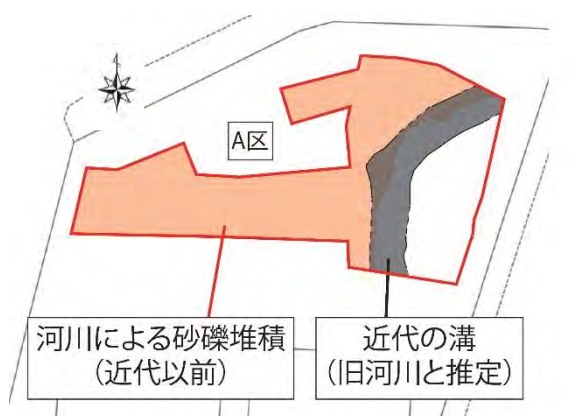


出川南遺跡周辺の居住域変遷想定図

(4) 近代の溝跡



近代の溝の底部（西から撮影）



調査区内における近代の溝の位置



近代の溝と、近代以前の自然流路の断面

近代に造られた溝を確認しました。胴木を渡して、その上に石積みをして補強していました。断面の写真を見ると、上から掘り込まれているのが分かります。その右手には近代以前の大規模自然流路による砂礫の堆積があります。

(5) 調査のまとめその2 現在も流れている穴田川…その流路の変遷が分かりました

近代以降、特に昭和戦前期以降の調査区周辺は工業用地化などの開発が進みました。古い航空写真を見ると、その様子がよく分かります。



昭和 23 年（1948）…工業用地が整備され、穴田川は水路化された



昭和 37 年（1962）…国道 19 号線バイパスが開通、公営住宅の北側は再び工業用地に
（航空写真はいずれも国土地理院電子国土空中写真に加筆したもの）



近代以降の開発により掘りこまれた様子（調査区北壁）

今回見つかった大規模な流路は、現在調査区の横を地下水路となって流れている穴田川の古い流路であった可能性があります。穴田川の流路はどのように変遷してきたのでしょうか。

- (1) 古代以前 元々は水の流れが非常に緩やかな湿地帯であったが、ある時期から河川になったと考えられる。その正確な時期は不明である。
- (2) 近世以前 奈良井川方向から流れてくる、幅の広い河川であったと考えられる。ただし堆積層内に大きな石は少なく、大規模な洪水は多くなかったようである。
- (3) 近世 ほぼ今と同じ方向の流れが明治時代初めころの地形図に表されており、流れの向きに現代との違いはそれほどないと考えられる。
- (4) 近代前半 今回発見された近代の溝に造り替えられた。西縁は胴木と石積みで補強されており、溝の底からはボルトのついた木材が発見された。
- (5) 近現代 昭和戦前期、工業用地造成に伴って用地を区画する道路が造られ、それに沿って水路化されたと考えられる。その後穴田川は一部地下水路化し、現在に至る。

現在は小さな流れの穴田川ですが、過去には幅の広い大きな川だった時代もあったようです。



1 調査の概要

【土居尻第15次調査】	【土居尻第16次調査】
(1) 遺跡の所在：松本市城西2丁目	(1) 遺跡の所在：松本市大手3丁目
(2) 調査目的：松本城南・西外堀復元事業に伴う緊急発掘調査	(2) 調査目的：内環状北線整備事業に伴う緊急発掘調査
(3) 調査期間：令和3年12月～令和4年8月	(3) 調査期間：令和4年7月～令和5年1月
(4) 調査面積：約400㎡（平面積） 約1,070㎡（のべ面積）	(4) 調査面積：約350㎡（平面積） 約840㎡（のべ面積）
(5) 主な遺構：土塁跡、水道施設跡、半地下状遺構、石組み井戸跡など	(5) 主な遺構：建物礎石・柱、石敷遺構、木組み井戸跡など
(6) 主な遺物：金箔カワラケ、土人形、鯨瓦、鉛玉など	(6) 主な遺物：人骨・獣骨、木簡（笹塔婆・こけら経）、志野焼大鉢など

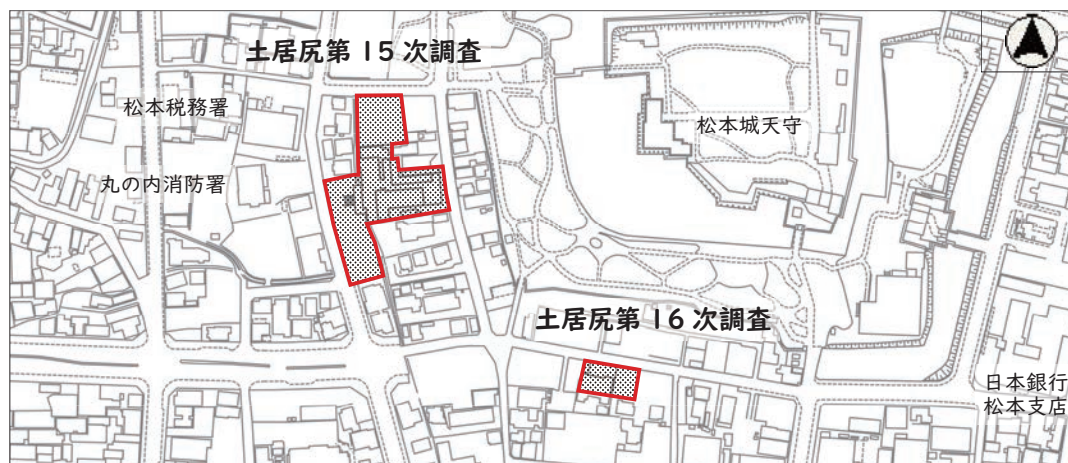


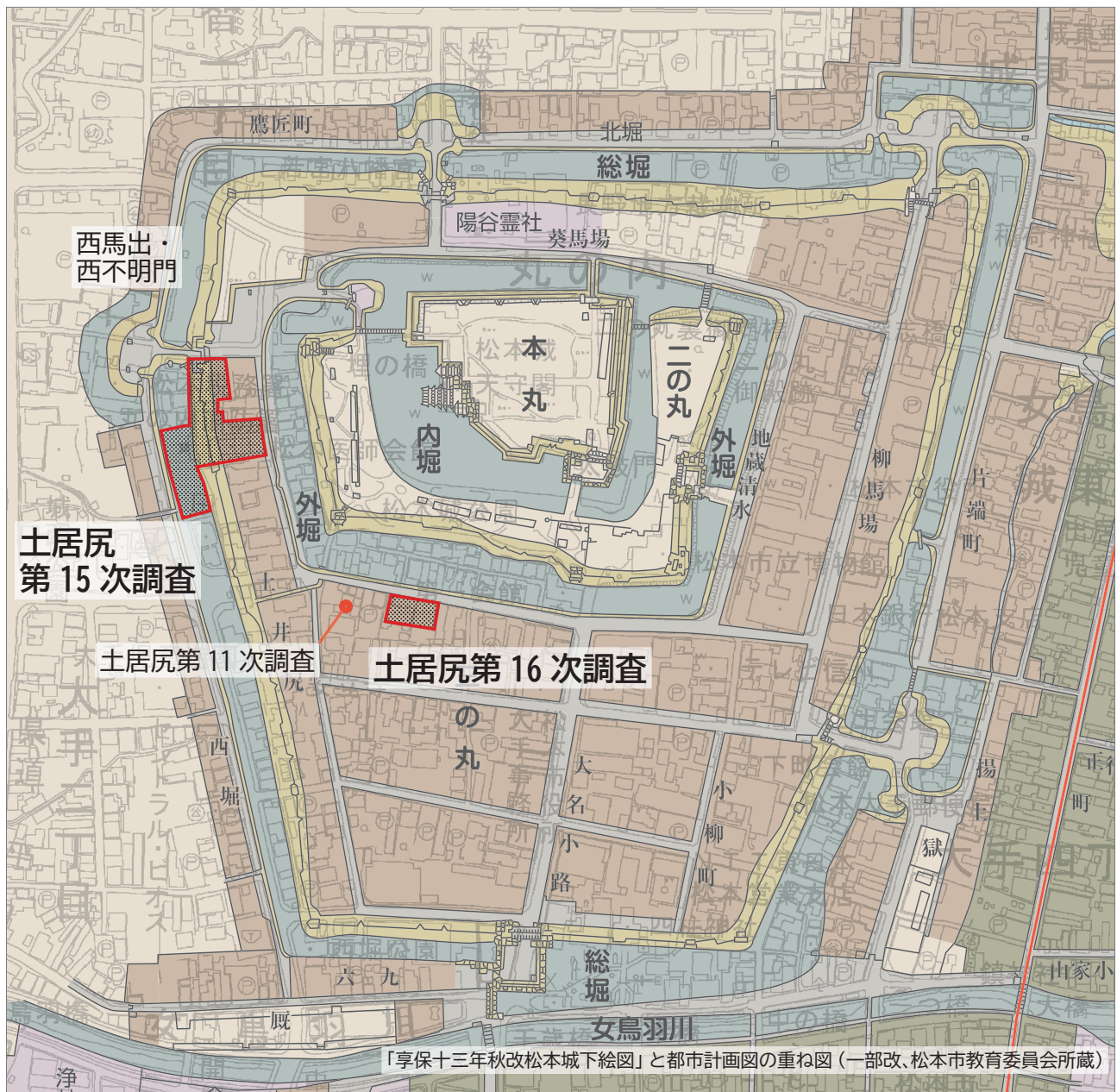
2 遺跡の概要

松本城は本丸・二の丸・三の丸と、それぞれを囲む3重の堀（内堀・外堀・総堀）で構成される。その外側には城下町が位置しています。江戸時代、三の丸には家老をはじめとする家臣の屋敷地などが立ち並んでいました。土居尻は、三の丸の南西部分の地区で主に中級武士の屋敷が広がっています。

第15次調査地は、^{にしかずのもの}西不明門に隣接する屋敷地や総堀・土塁にあたります。藩主戸田氏時代に描かれた絵図（「享保十三年秋改松本城下絵図」）に調査地を重ね合わせてみると、調査地は吉江氏の屋敷地（約400坪）の一部と推定されます。

第16次調査地は、南外堀の道を挟んだすぐ南側の屋敷地にあたります。「享保十三年秋改松本城下絵図」に調査地を重ね合わせてみると、調査地の西半は竹中氏の屋敷地、東半は二宮氏の屋敷地であることが分かります。





3 土居尻第 15 次調査の成果

(1) 総堀・土塁跡

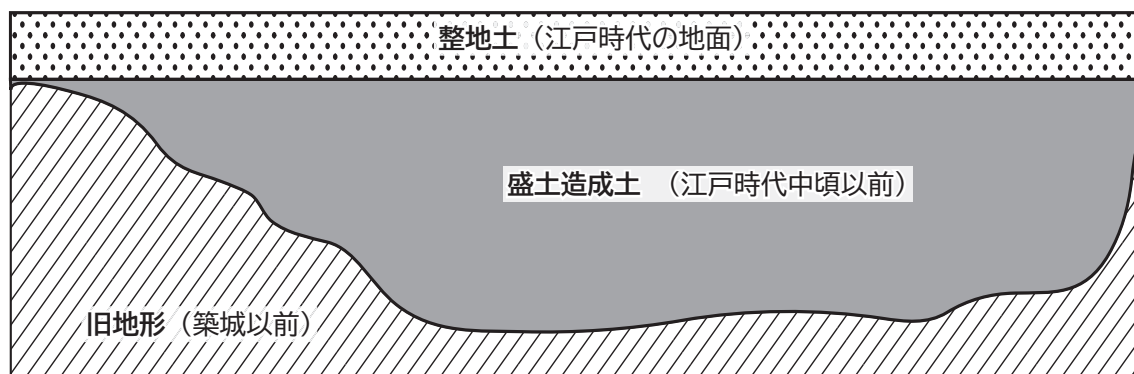
調査地西側の一部において地表下2.5m程度で総堀の堀底を確認しました。

土塁跡の調査では、東西の法尻部分^{のりじり}を確認することができ、調査地付近では、土塁の幅が 15m 程度あることが分かりました。また、土塁が幕末頃に修復されていることも分かりました。



(2) 江戸時代中頃以降の盛土造成と整地について

- ア 松本城築城以前は洪水等により、地面が凸凹に形成されていました（旧地形）。
- イ 江戸時代中頃までに、表面を平らにするために盛土造成を行い、さらに、その上に生活するための地面を整地し武家屋敷を造ったことが分かりました。
- ウ 武家屋敷を建て替える時には、整地土を削平した後に、また同じように整地したことがわかり、今回の調査では幕末の整地土のみが残っていました。
- エ 近くの土居尻第6次調査でも同様の盛土造成が確認されているため、土居尻地区の北西部は、地形に起伏があり、屋敷地を造るためには造成工事が必要であったことがうかがえます。



(3) 幕末ごろの武家屋敷地

幕末の地面は、現代の地表面とほぼ変わらない高さで見つかりました。そのため、現代の開発等により大部分が壊されていましたが、調査区北東部で建物の礎石跡や溝跡などが見まりました。

(4) 江戸時代後半の武家屋敷地

幕末の地面を削ると、江戸時代後半の遺構・遺物が確認できました。ゴミ穴跡、塀の基礎、半地下状遺構、水道施設跡など武家屋敷に関連する遺構が見つかりました。半地下状遺構は、長方形に丁寧に掘られており、貯蔵用等のために掘った半地下状の蔵である可能性があります。松本城近辺は、地下水位が高く半地下状遺構の設置には適しておらず、これまでの調査で見つかったことはありません。

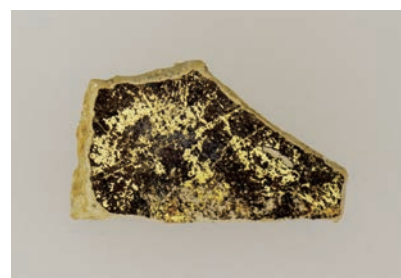
特筆すべき遺物として、金箔カワラケがゴミ穴跡から出土しました。金箔カワラケは、中世の頃から饗宴の場や特別な儀式の際に使用される酒器です。全国的に出土例は少なく、大名クラスの城・居館等での出土が目立ちます。



半地下状遺構

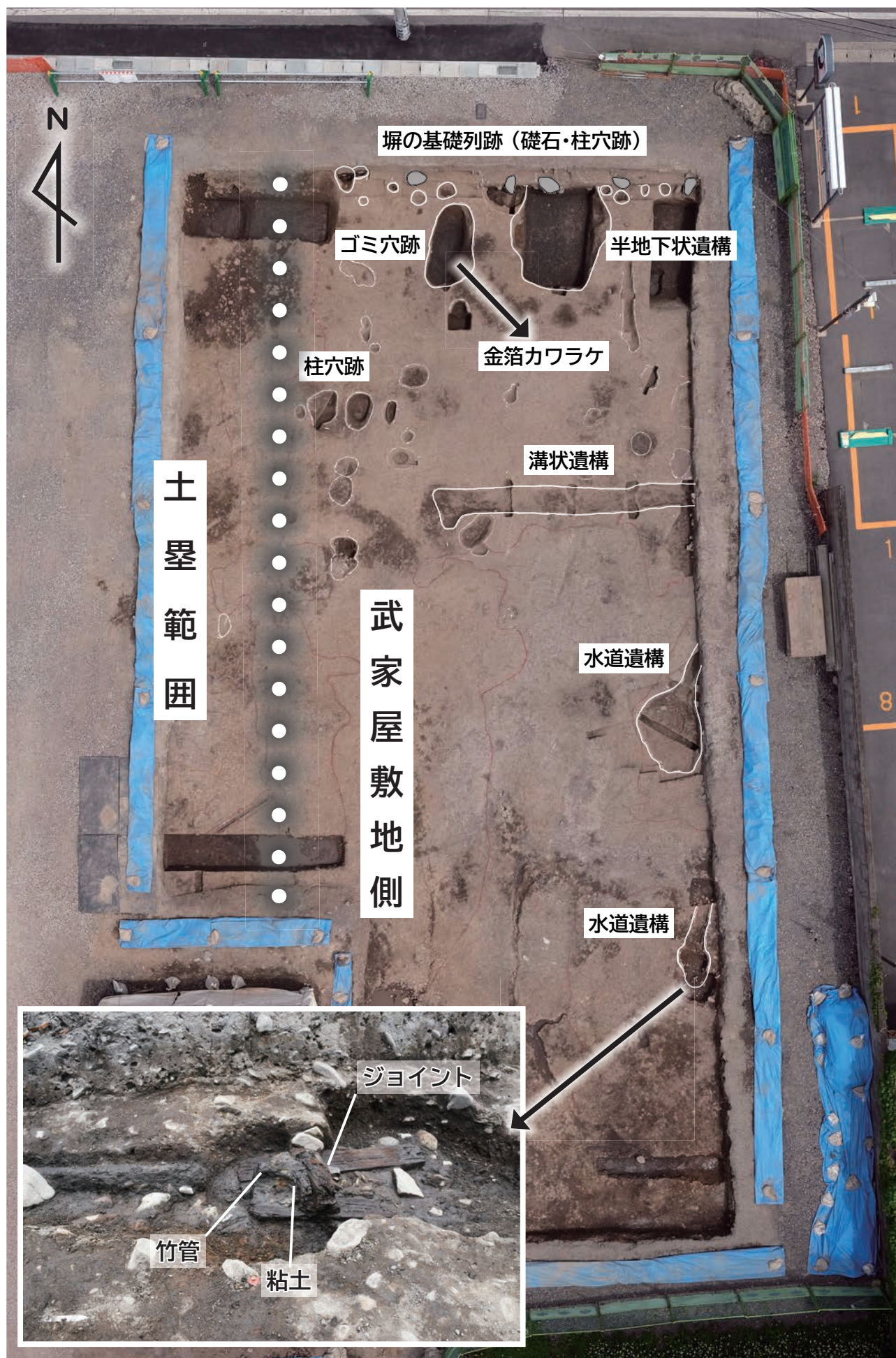
長さ6.4m以上、幅約3.5m、深さ85cmを測ります。

役目が終わった後は、ゴミ穴として使われたため、多量の陶磁器や木製品等が見つかりました。



金箔カワラケ

ゴミ穴跡から出土しました。内外面に漆が塗られ、その上に金箔が細工されています。



(5) 中世以前の地面

江戸時代の盛土造成土を除去すると、松本城築城以前の地面が見つかりました。南側は河川の洪水により砂礫層が堆積し一段高くなっていました。砂礫層の堆積していない北側では、石組みの井戸跡が見つかったのみで、他に遺構は確認できませんでした。井戸跡からは遺物が全く出土しなかったため、いつ造られたのかが不明ですが、周辺の調査成果から古代から中世にかけてのものと考えられます。



全景（南東から）
中世以前の
の地面で見
つかったの
は、井戸跡
だけでした。



石組みの井戸跡

直径（内径）約65cm、深さ約3mの井戸で、石を丁寧に積んで造っている様子がよく分かります。井戸の底は湧水の多い砂礫層まで掘り下げられていました。



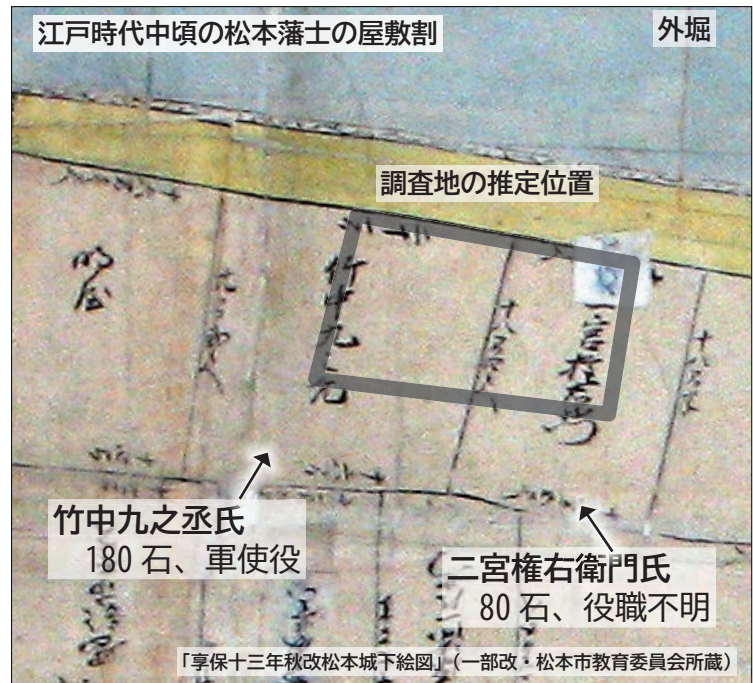
石組みの井戸跡の断面

4 土居尻第 16 次調査の成果

(1) 江戸時代の武家屋敷

江戸時代の武家屋敷に関わる遺構・遺物が出土しました。出土遺物の生産時期から、江戸時代前期から後期までの遺構が確認できました。調査区の西部に 2～3 cm 大の礫を敷き詰めたような石敷き遺構が見つかり、その位置関係から、玄関や建物への出入口に敷かれたものと考えられます。

遺構密度が高くないことから、屋敷地は江戸時代をとおして大きく変わっていないことがうかがえます。



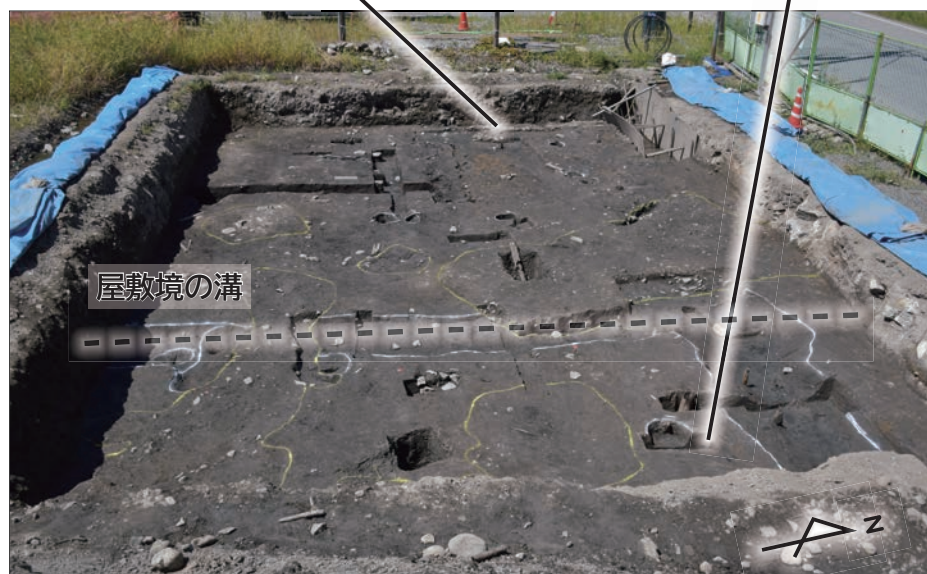
石敷き遺構

数cm大の石が敷かれていました。屋敷地内の位置関係から、出入口付近がぬかるまないように敷かれた石であると考えられます。



柱穴と礎板石

礎板石として扁平な大形の石が使用されていました。屋敷の基礎跡とみられます。



(2) 三の丸形成期の盛土造成

もともと湿地帯であった調査地周辺に、砂や粘質土など数種類の土を混ぜた版築土で盛土造成をしていることが分かりました。その造成土には16世紀末～17世紀初頭に生産された瀬戸焼が混入していたため、小笠原貞慶か石川数正・康長が城主であった時の三の丸を整備した時代の造成土であると推定されます。その時代の文献資料は数少なく、今回の成果は松本城形成について理解する上で重要な手がかりになると期待されます。



建物跡

見つかった柱穴から、2間（約3.6m）×4間（約7.2m）の建物であることが分かります。



建物の柱材

水分を多く含んだ土に埋もれていたため、非常に良い状態で保存されていました。



木枠の井戸

一辺70cm程の方形状に組まれた井戸の木枠が見つかりました。

(3) 旧地形と中世の祭祀場

三の丸形成以前の調査地一帯の地形は、9世紀頃（平安時代）までは小川が流れ、16世紀中頃～末にかけて水草が生育する泥深い沼地のような環境であったことが分かりました。三の丸として整備されるまで長らく水辺であり、人が住めるような場所ではなかったことがうかがえます。

また、調査の結果、沼地になる直前に小川で何らかの祭祀を行った形跡が見つかりました。小川の底面から、人骨・獣骨（馬や鹿など）と共にこけら経や笹塔婆^{ささとうば}と呼ばれる木簡

が出土しました。以前隣地で実施した第11次調査地点からも、こけら経等の祭祀的木製品が数百点出土しています。生活道具はほぼ認められなかったことから、一帯は何らかの祭祀を行った空間であったと考えられます。



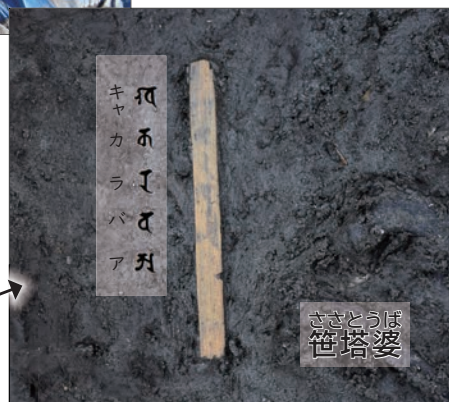
全景（左が北）

東から西へ流れる小河水が3本確認できました。底面に堆積していた石のサイズから、かなり緩やかな流れであったことが分かりました。



獣骨等の出土状況

北側の流路跡の中から、数種類の獣骨がまとめて出土しました。水流のせいか、骨格の各部位はバラバラの状態で見つかりました。



獣骨と笹塔婆（ささとうば）

獣骨に混じるように、笹塔婆などの祭祀具が一緒に出土しました。獣骨と関係していたかもしれません。

※ 「キャ・カ・ラ・バ・ア」とは、梵字で「空・風・火・水・地」を意味し、五輪塔に書かれている文字と一緒にです。

● こけら経と笹塔婆 ●

こけら経・笹塔婆は短冊形の木の薄片（長さ25～30 cm、幅1～3 cm、厚さ0.05～0.1 cm）に経文あるいは仏や菩薩などの名号を墨書したものです。

こけら経には経文が墨書されており、20枚または40枚を一組に束ねて納めていました。これは死者への追善供養や生前に後生安楽を祈るためのものとされます。

笹塔婆には仏や菩薩などの名号が墨書されています。束ねて使用するこけら経とは異なり、1枚で完結するものです。



こけら経イメージ図



笹塔婆イメージ図

史跡松本城南外堀

第5次発掘調査

—南外堀初めての横断調査—

栗津原 準也



1 調査の概要

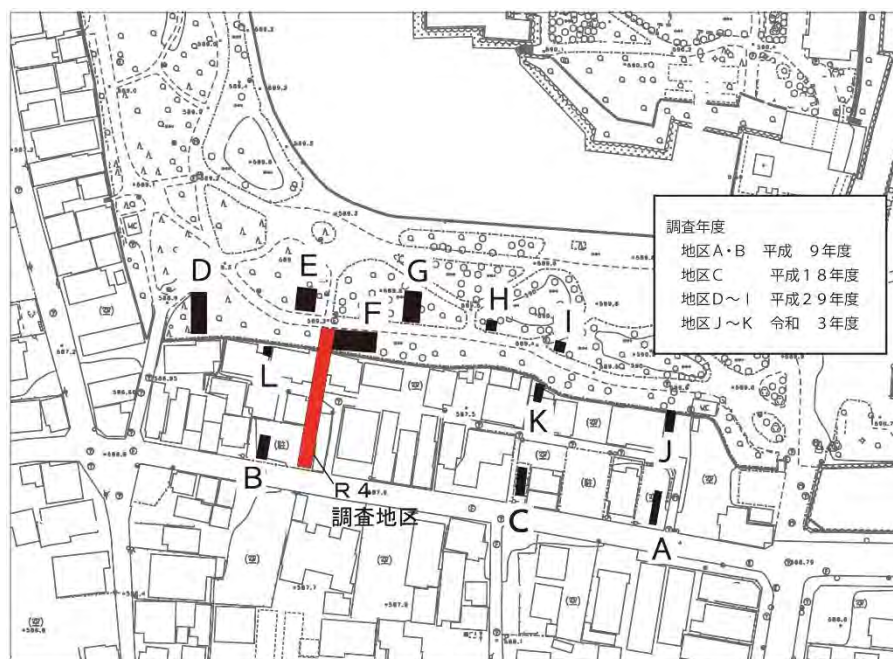
- (1) 遺跡の所在：松本市大手3丁目
- (2) 調査目的：史跡松本城南・西外堀復元事業に伴う南外堀跡の確認調査
- (3) 調査期間：令和4年6月～12月
- (4) 調査面積：約352㎡
- (5) 主な遺構：石垣、木杭、堀底、土塁法尻
- (6) 主な遺物：軒丸瓦（戸田家、水野家）、軒平瓦、近代陶磁器

2 遺跡の概要

本調査地は、大正8年から昭和初年にかけて埋め立てられた、松本城南外堀跡内に位置しています。外堀の明確な成立時期は不明ですが、おそらく築城期と一緒に整備されたものと考えられており、古文書等から江戸時代をとおして何度も浚渫（^{しゅんせつ}泥さらい）が行われたことが分かっています。そして、明治維新と廃藩置県後、松本城が政庁・軍事的拠点としての役目を終える中で、外側の一部（南側・西側）が埋め立てられ、宅地化しました。

現在、埋め立てられた南・西外堀の復元整備に取り組んでいます。

今回の調査は、南外堀の形状・深度を確認するためのものです。



調査地区 位置図

3 調査成果

(1) 三の丸側の石垣

ア 石垣と構造

調査地南端からは、南外堀と三の丸との境界に設置されていた石垣が出土しました。石垣は粘土の上に設置されており、小型の杭で石が固定されていました。

石の面がそろえられており、列をなしていることから設置された当時の位置を保っているものと思われます。



石垣出土状況

左赤丸 掘削状況写真



イ 広がる集石

石垣から外堀内に向かって集石が広がっていました。南外堀の埋め立ての際に、石垣上部の石が取り壊され、堀に投げ込まれたものと考えられます。

石垣は地表から 50 cm 程度の深さで出土していますので、出土した石垣の上部にもう 1 段石が積まれていたとすれば、現在の地表面とほぼ同じ高さとなります。

ウ 重なる外堀のライン

過去の調査でも同様に三の丸側の岸から石垣が見つかっており、各調査区の石垣の出土地点を結ぶことで、南外堀の三の丸側までの範囲が確認できました。



(2) 外堀の深度と形状

ア 南外堀の最大深度

横断調査を行ったところ、南外堀は大正時代からの埋め立て層と外堀の堆積層の 2 層に分かれていました。

今回の調査地点では、南外堀の最大深度は現在の地表面から 3 m 程度であったことが分かりました。



石垣から堀最深部までの様子 (赤いラインが堀底)

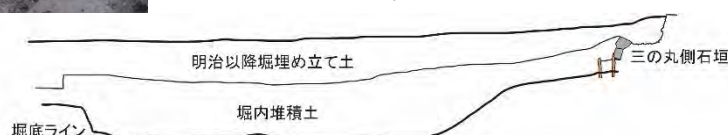
イ 堀底の形

これまで松本城南外堀は三の丸側が深くなっている「片薬研堀」^{かた やげん}であると考えられていましたが、今回の横断調査の結果、南外堀の形状は「片薬研堀」ではなく「箱堀」であることが分かりました。



左写真の赤線が南外堀の堀底ライン
下の図に示したとおり、堀底は平面状
になっていました。

南外堀 断面概略図



片薬研堀 模式図

片薬研堀とは、傾いたLの字のような形で、一方の壁はほぼ垂直で、もう一方の壁は勾配をもたせた堀の名称。



箱堀 模式図

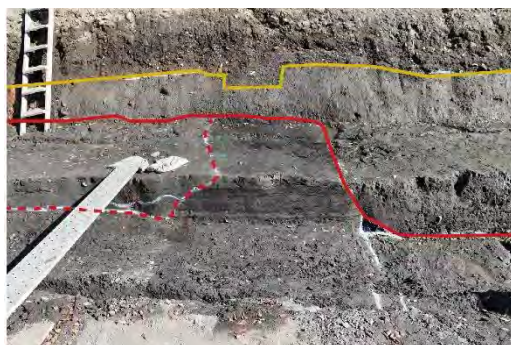
箱堀とは、堀の底に平面状の部分がある堀の名称。底から見たとき両側の壁が高くなっている。

(3) 南外堀の堀底

ア 堀底の段差

南外堀の中央付近で堀底が段差になっていることが分かりました。東西方向に続いていき、今回の調査範囲外まで続いています。

赤いラインが南外堀の堀底になります。
写真中央で水平の自然堆積層を確認しました。
自然堆積層は赤線と点線の間でのみ確認できました。



埋め立て土

南外堀
堆積土

堀底で確認できた段差

外堀の堀底に段差あるいは畝^{うね}のような高まりが設置されている理由として次の2通りが考えられます。

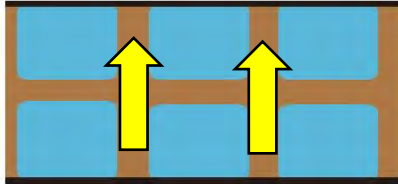
イ 2つの可能性

① 堀内障壁

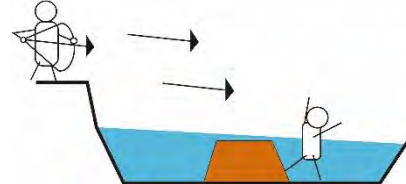
一つは松本城南外堀に堀内障壁が設置されていた可能性です。

堀内障壁とは、堀の中に設置された防御施設として利用された障壁物のことで、代表的なもので堀底が障子のように仕切られた「障子堀」が挙げられます。

堀内障壁の役割として、敵兵が堀の中を歩きにくくするためや、敵兵の歩く場所を特定し、攻撃しやすいようにするためと考えられています。



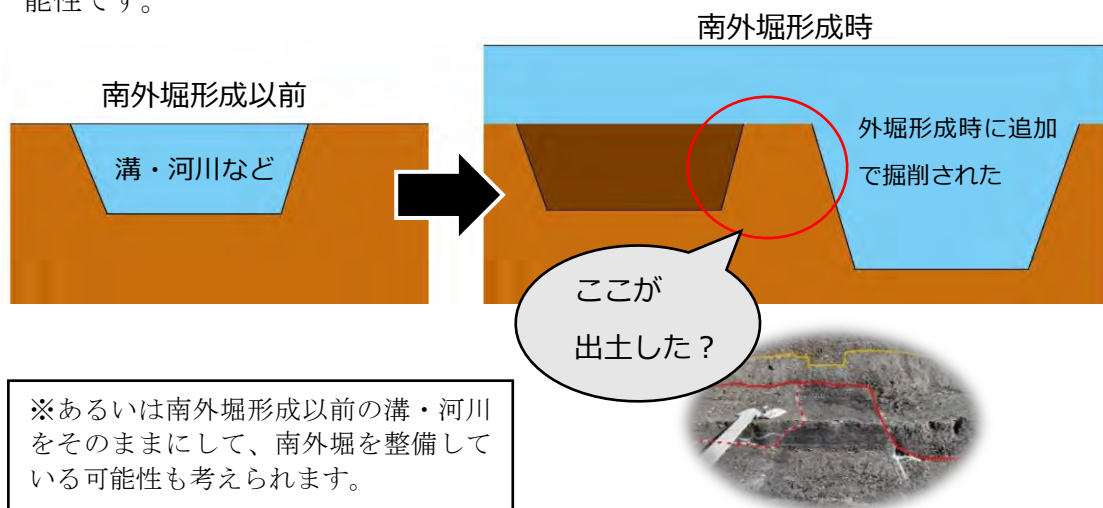
侵攻経路を誘導する



足を止めたところを攻撃

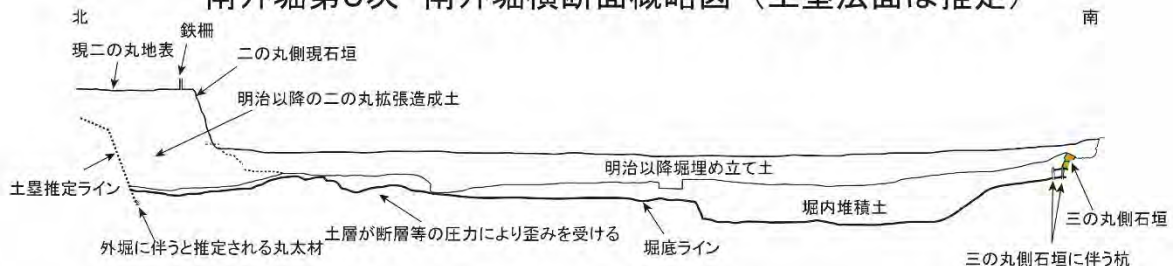
② 松本城南外堀形成以前の岸

もう一つは南外堀形成以前の堀や溝、河川などの岸であった可能性が考えられます。南外堀を形成する際に埋め立てられ、南側に広げる形で南外堀が整備された可能性があります。



今回の調査では時代差を特定するための遺物が出土しなかったため、堀底の段差がどのような用途で設置されたものなのか不明です。いずれにせよ、松本城外堀は従来考えられていた傾斜した堀底ではなく、障壁あるいは段差といったものが設置されていることが分かりました。

南外堀第5次 南外堀横断面概略図（土塁法面は推定）



(4) 木杭

ア 二の丸土塁裾部と杭

過去の調査では、二の丸土塁の裾部から密集した木杭の列が確認されています。今回の調査でも出土するだろうと予想していましたが、確認できませんでした。

杭自体は数本出土していますが、過去の調査で確認されている杭列と比べ、数も少なく密度の低い出土状況となっています。杭の形状自体は類似していますので、取り壊された杭列の一部が残存していたのかどうか、今後の調査が必要になります。



今回出土した木杭



過去に出土している杭列

イ 二の丸土塁基礎工事か

土塁底部から横倒しになった半裁丸太が出土しました。詳しい用途は分かっていませんが、二の丸土塁の基礎工事に関する丸太の可能性が考えられます。

丸太を井桁状に組み、土塁底部の基礎に利用していたと考えられる事例が、大坂城などで確認されています。



(5) 地震の痕跡か

ア 断層を発見

南外堀の堀底から断層が複数箇所を確認されました。断層の方向は上下水平様々な断層が確認できました。

イ 土層のゆがみ

地層の一部は液状化現象により、砂や泥が混じり合う地盤の緩い箇所が確認されました。ほかにも、断層等の圧力によって土層が歪みを受けるなど、地震による影響が大きい場所が確認できました。



断層(黄ラインでずれている)



赤いラインが堀底です。水平ではなく、上下に歪んでいることが分かります。

4 調査のまとめ

(1) 石垣

松本城南外堀の三の丸側の岸から、過去の調査と同様に石垣が出土しました。過去の調査結果から推定されていた外堀ラインと重なり、南外堀の三の丸側の岸が確認できました。

(2) 最大深度

今回の調査地点の南外堀の最大深度は現在の地表から3mであることが分かりました。また、今まで考えられていた「片薬研堀」ではなく、底が平面状な「箱堀」であることが分かりました。

(3) 堀底の段差

南外堀の底には段差があることを確認しました。今回の調査では設置された目的は確認できませんでしたが、松本城外堀の底には段差を利用した工夫が施されている可能性があることが分かりました。

(4) 木杭

過去の調査で確認されている二の丸土塁裾部に設置された杭列とは違い、半裁丸太や傾いている木杭が出土しました。松本城外堀の木杭は二の丸土塁の護岸用や侵入者に対する防御目的以外にも、二の丸土塁の基礎工事などで設置された杭である可能性が考えられます。

(5) 断層

南外堀堆積層の下から、断層及び土層の歪みが確認されました。範囲は限定的ですが、複数の断層や地層の歪みの規模から大きな地震が発生したものと考えられます。この地震がいつの時代に発生したものかは分かっていません。

5 近代遺構

今回の調査では現在の松本城二の丸公園の一部を掘削しています。明治時代に行われた二の丸改修時に拡張された場所のため、江戸時代の遺物・遺構はありませんが、同時期に利用されていた旧制松本中学校関連の遺物・遺構が出土しました。

(1) 遺構

石列が出土しました。石列の周囲から旧制松本中学校の校章のボタンなどが出土しているため、旧制松本中学校に関する遺構と考えられますが、旧制松本中学校の位置図等を見ても、今回の調査地に該当する施設はなく、詳細は不明です。

(2) 遺物

旧制松本中学校の校章のボタン以外にも、松本に駐屯していた歩兵第五十連隊と記された記念品の杯が出土しています。



旧制松本中学校関連の石列



歩兵第五十連隊記念品の杯

史跡弘法山古墳

第4次発掘調査

— 3世紀のまつもとの王墓を探る —

小山 奈津実

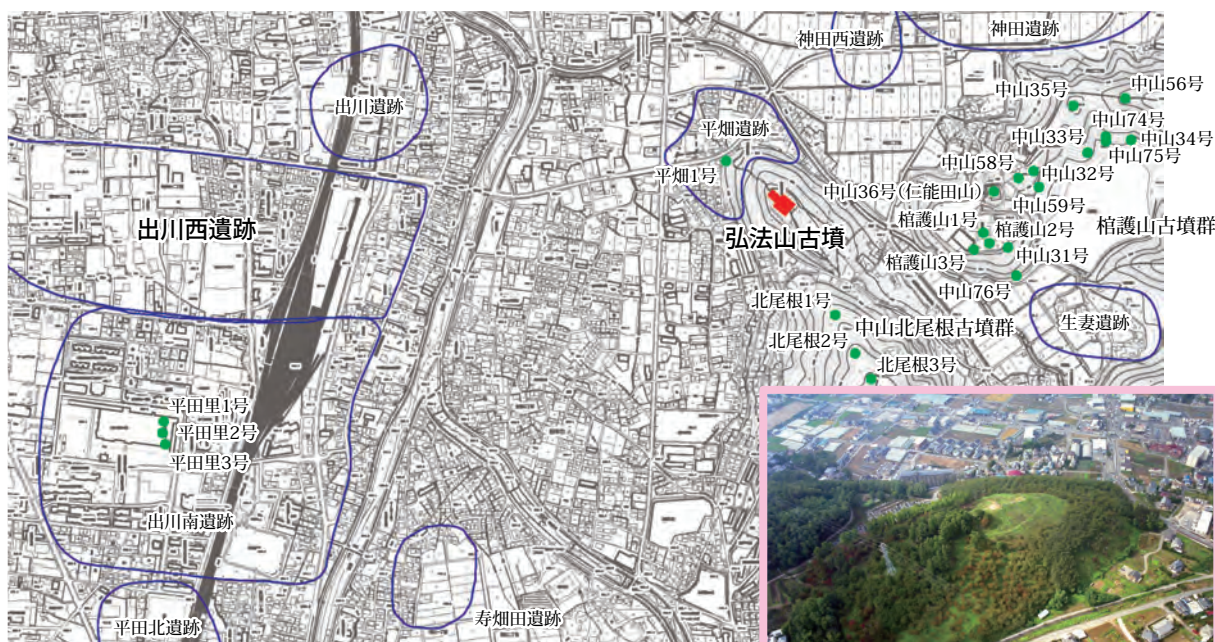
1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：松本市並柳2丁目、松本市神田2丁目
- (2) 調査目的：史跡弘法山古墳再整備事業
- (3) 調査期間：令和4年6月7日～継続中
- (4) 調査面積：約80㎡



2 遺跡の概要

弘法山古墳は松本市東部にある中山丘陵の北端に立地する全長約66mの古墳で、3世紀末の築造と考えられています。丘陵の先端部に古墳があることは以前から知られていましたが、明治以降に畑地になっていたこと、第二次世界大戦の末期に高射機関銃が設置されていたことなどから、昭和49年に発掘調査が実施されるまで、大半が破壊されてしまった古墳であると認識されていました。昭和49年の発掘調査は学校の運動場建設に先立って実施され、調査の結果、弘法山古墳は東日本最古級の前方後方墳であることが分かりました。その後、昭和51年に国史跡に指定され、昭和57年には史跡公園として整備が行われ、現在は桜の名所としても親しまれています。



古墳の位置



3 昭和 49 年の調査成果

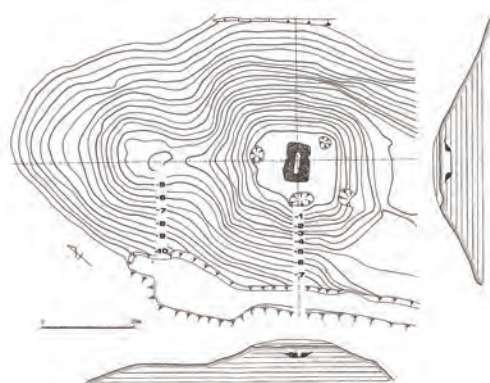
(1) 墳丘

【墳 形】前方後方墳

【墳 丘 長】約 66m

【外表施設】石列を確認（葺石となるかは不明）
墳輪は未確認

【築造年代】3 世紀末



弘法山古墳 墳丘実測図

(2) 埋葬施設

埋葬施設は長さ 5.5m、幅 1.32m、深さ 0.93mの竪穴式石室状の礫槨^{れきかく}で、後方部の中央に主軸とほぼ直交するように位置しています。礫槨を構築する石は河原石が用いられており、これらは松本平に集まる複数の河川から運搬されたと考えられます。礫槨内は黒土を入れて固く締めており、天井石は確認されていません。



昭和 49 年の調査で確認した
竪穴式石室状の礫槨

(3) 副葬品

【銅 鏡】上方作系浮彫式獣帯鏡 1 面

【装身具】ガラス小玉（首飾り・手首飾り）738 点

【武 器】鉄剣 3 点、銅鏃^{どうぞく} 1 点、鉄鏃^{てつぞく} 24 点

【工 具】鉄斧^{てつぷ} 1 点、
鉋^{やりがんな}（木の表面を削って平らに仕上げるための工具）1 点



礫槨から出土した銅鏡

面径は 11.65 cm で、銘文に「上方作竟自有
□青□左白帟居右」とあり、青竜と白虎の 2
対が薄肉彫り^{うすにくぼ}で表現されています。銘文から、
中国の皇帝直属の工房で製作され、日本に伝
来した、舶載鏡^{はくさいきょう}であることが分かりました。



副葬品の配置

(4) 出土土器

礫槨の直上から、壺 10 点、高杯 10 点、器台 2 点、甕 2 点、手焙形土器^{てあぶりがたどき} 1 点などの土器がまとまって出土しました。祭祀などの目的で用いられた可能性が考えられます。これらの土器は東海地方の特徴を有することから、被葬者は東海地方と深い関わりがあった人物であったと推定されます。



弘法山古墳から出土した土器

いでがわにし

● 出川西遺跡 ●

出川西遺跡は、弘法山古墳から西に1,200mの南松本駅北側一帯に広がる遺跡です。平成25年に実施した発掘調査では、古墳時代前期の竪穴住居の壁際から、土器11点が1～2列に並べ置かれた状態で出土しました。

これらの土器には、松本の特徴を持つものと、東海地方の特徴を持つものの2種類がみられました。このことから、出川西遺跡一帯は、弘法山古墳の被葬者が拠点とした集落のひとつであった可能性が考えられます。



出川西遺跡から出土した土器

4 史跡弘法山古墳再整備事業

(1) 弘法山古墳が抱えている問題

- ア 昭和49年の調査は埋葬施設を中心とした範囲であったことから、墳丘の正確な形態や規模、葺石などの外表施設や周辺遺構などの解明が不十分である。
- イ 弘法山古墳と周辺にある古墳群や集落との関連の解明が不十分である。
- ウ 昭和57年の整備以降、本格的な整備を実施していないことから、整備や保存活用を図る必要がある。



発掘調査などによって弘法山古墳の学術的な価値を明らかにした上で、整備や保存活用を図り、弘法山古墳の魅力を伝えたい。

(2) 整備に向けて実施している内容

- ア 赤色立体地図の作成：地形測量による弘法山古墳及び周辺の古墳分布の確認
- イ 弘法山古墳の発掘調査：古墳の形態や規模などの確認
- ウ 関連古墳群の調査：弘法山古墳に後続する周辺古墳群の調査（東海大学と連携）



中山56号墳の発掘調査

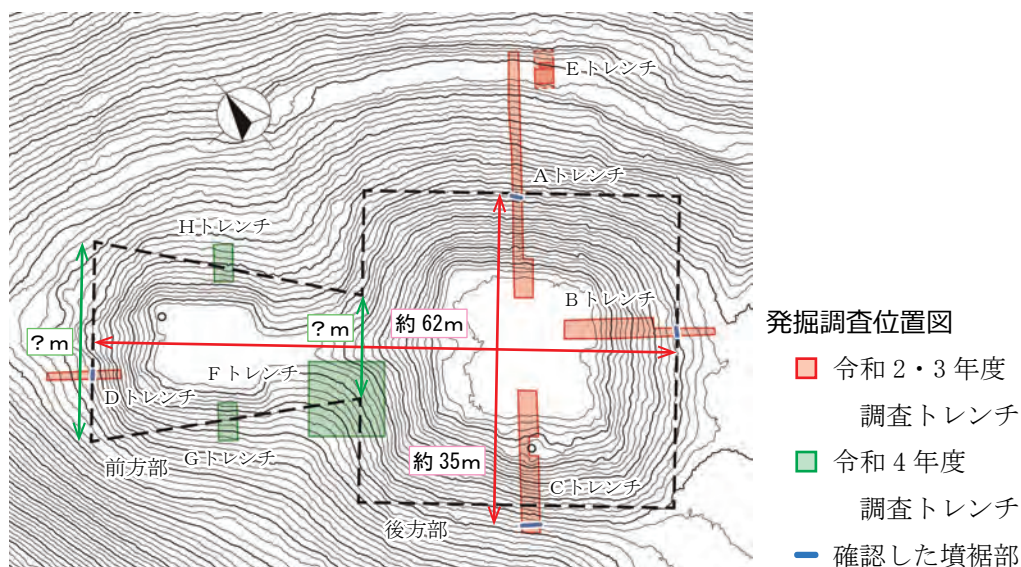


中山56号墳の発掘調査

5 令和2・3年度の調査成果

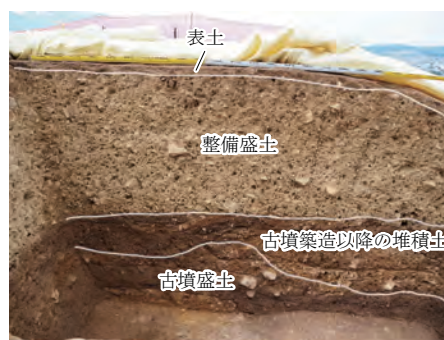
(1) 調査箇所

墳丘の規模や外表施設の有無の確認、昭和49年調査トレンチ状況の確認のために、前方部及び後方部の5カ所でトレンチ（古墳の性質を判断するために掘る溝）調査を実施しました。（A～Eトレンチ）



(2) 盛土

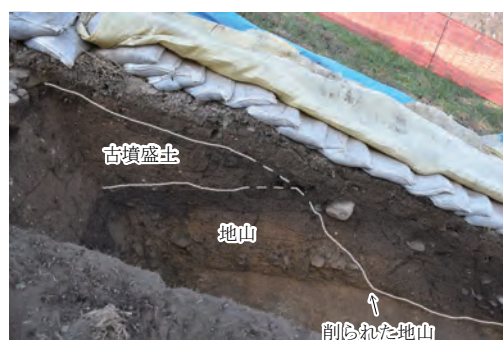
古墳の盛土、古墳の築造後に堆積した土、史跡公園として整備をした際に古墳を保護するために盛った土などを確認しました。古墳の盛土は固く締まっており、丁寧に突き固めて古墳が造られたことが分かりました。



Aトレンチ墳頂部

(3) 墳裾（古墳の端の部分） ふんすそ じやま

地山（土地の基盤となる土層）を削って整形してから土を盛る方法、地山を削らずに土を盛る方法の2種類の工法を確認しました。



Aトレンチ墳裾部



Dトレンチ墳裾部

(4) 墳丘規模

A～Dトレンチで確認した墳裾部から、古墳の全長及び後方部の幅を推定することができました。

古墳の全長：約 62m (B・Dトレンチの墳裾部から推定)

後方部の幅：約 35m (A・Cトレンチの墳裾部から推定)

(5) 集石

Bトレンチの墳丘の外側にあたる位置から、10～20 cm程度の石がまとまって確認されました。この石は角礫だけでなく円礫も含まれていることから、河川から持ち込まれた可能性が考えられます。出土位置から、崩落した葺石の可能性もありますが、詳細は不明です。

Bトレンチで確認した石



6 今年度の調査成果

(1) 調査箇所

前方部の南西・北東、くびれ部（前方部と後方部が結合する部分）の南西の3カ所にトレンチを設定し、調査を実施しています。調査では、墳丘の形状や規模、外表施設の有無の確認を目指しています。（F～Hトレンチ／位置は前頁参照）

(2) 盛土

Fトレンチでは、史跡公園として整備をした際に古墳を保護するために盛った土などの下で、古墳の盛土を確認しました。令和2・3年度に確認されたものと同様に、古墳の盛土は丁寧に突き固められています。

(3) 前方部の形状

古墳の前方部の形状は、台形の他に、^{ばちがた}撥形（三味線の撥のように前方部が開く形）、^{えかがみがた}柄鏡形（鏡の柄のように前方部がまっすぐな長方形）が見られます。弘法山古墳の前方部は、どのような形状をしているのか判明していないことから、Fトレンチの調査で確認を目指しています。



台形



撥形



柄鏡形



(4) 墳裾

F トレンチでは、前方部側の墳裾部を確認しました。また、墳裾部の付近では 20 cm 程度の石が確認されました。この石は、^{きていせき}基底石という、葺石の一番下に据えられた大型の石になる可能性が考えられますが、現段階で他に基底石と思われる石が確認されていないことから、引き続き調査を進めて検討をしていきます。また、墳裾部の外側では、ほぼ水平に並ぶ 10 ～ 15 cm 程度の石が確認されました。これは、古墳の外側に置かれた^{しきいし}敷石の可能性が考えられます。



F トレンチで確認した墳裾部と
基底石・敷石と推定される石

(5) 集石

F トレンチの墳裾部付近は、5 ～ 20 cm 程度の石が多量に混ざった土により墳裾部が埋まっていました。葺石などの古墳に関わる石となるかは現段階で不明のため、引き続き調査を進めます。



F トレンチで確認した石

7 まとめ

- (1) 古墳の盛土は一部の範囲で確認をしています。盛土は令和 2 ・ 3 年度と同様に、土を丁寧に突き固めていることが分かりました。
- (2) 前方部の形状は現段階で判明していないため、引き続き調査を進め、確認を目指します。
- (3) 古墳の形状や規模を決定するための墳裾部は、F トレンチで一部確認されたものの、G ・ H トレンチでは現段階で確認されていません。今回の調査で墳裾部の確認ができると、弘法山古墳のくびれ部や前方部前端の幅が判明するため、引き続き調査を進めます。
- (4) F トレンチの前方部側の墳裾部では、基底石や敷石の可能性のある石を確認しました。また、墳裾部付近では多量の石が確認されています。現段階で葺石の有無は明らかにできていませんが、引き続き調査を実施し、検討を進めます。

来年度以降は、発掘調査報告書作成に向けて、令和 2 ～ 4 年度の発掘調査成果のまとめ、現在の学術的知見による昭和 49 年発掘調査成果の再整理を進めていきます。



南栗遺跡

—37年ぶりの大規模発掘で探る奈良井川西部の古代集落—

長野県埋蔵文化財センター
河西 克造

1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：松本市島立 5023 ほか
- (2) 調査目的：中部縦貫自動車道と中央自動車道長野線を連結する松本 JCT の建設事業
- (3) 調査期間：令和 4 年 5 月 12 日～同年 12 月 23 日
- (4) 調査面積：6,000 m²
- (5) 主な遺構：竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、木棺墓、溝跡、井戸跡、配石
- (6) 主な遺物：須恵器、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、青銅製品（帯金具）、鉄製品（鉄鏃・刀子・鉄釘・紡錘車）、石製品（こもあみ石）、土製品（紡錘車）、人骨

2 遺跡の概要

南栗遺跡は、奈良・平安時代を主体とした集落遺跡で、南北約 0.7 k m、東西約 1.2 k m と広範囲に分布する遺跡です。その北側には北栗遺跡が隣接し、南側には鎖川を挟んで下神遺跡があります。奈良井川西部には、奈良・平安時代の大規模集落が遺跡群の様相を呈しています。

中部縦貫自動車道の松本 JCT が南栗遺跡の遺跡範囲内に建設されることとなり、発掘対象面積は 59,400 m² と広域に及びます。発掘調査は本年度から開始され、調査は来年度以降も実施する予定です。

3 遺跡の調査歴

南栗遺跡では、1983 年～1985 年に松本市教育委員会による圃場整備に伴う発掘調査と、1985・86 年に長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）による長野自動車道建設に伴う発掘調査が実施されています。

前者は、遺跡範囲内のほぼ中央部で面調査と試掘調査が実施され、古墳時代後期～中世に

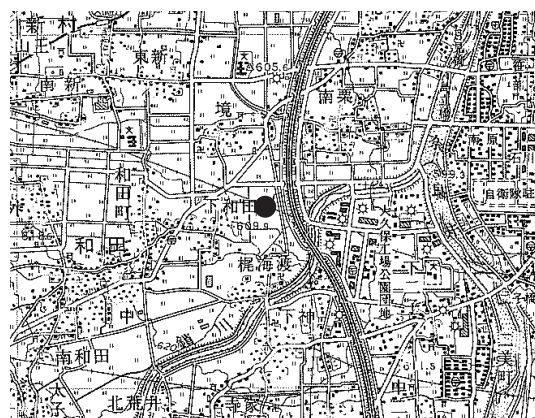


図1 遺跡の位置



図2 南栗遺跡の調査区

わたる遺構が確認されました。この地が複数時期にわたり居住域として利用されていたことが判明しました。なお奈良時代の竪穴建物跡の床下から完形の佐波理鏡（銅鏡）が出土しています。

後者は、南栗遺跡の遺跡範囲内を南北に縦断する形で実施され、調査対象面積は 39,390 m²に及びます。この調査では、古墳時代後期～平安時代までの竪穴建物跡 322 軒、掘立柱建物跡 104 軒に加え、中世と近世以降の遺構が確認されました。検出された遺構は、南北方向約 600 m まで広がり、奈良・平安時代の遺構は著しく重複する特徴がみられました。特筆する遺構では、L 字状に配置する掘立柱建物跡・竪穴建物跡や、完形の八稜鏡が副葬された平安時代の墓坑があります。



図3 南栗遺跡 長野自動車道 調査区 遺構配置図（埋文センターほか 1991 に加筆）

4 調査の成果

(1) 奈良・平安時代の集落の広がり

今回の調査区は、遺跡範囲の南端に位置し、長野道自動車道調査区の西側に隣接します。

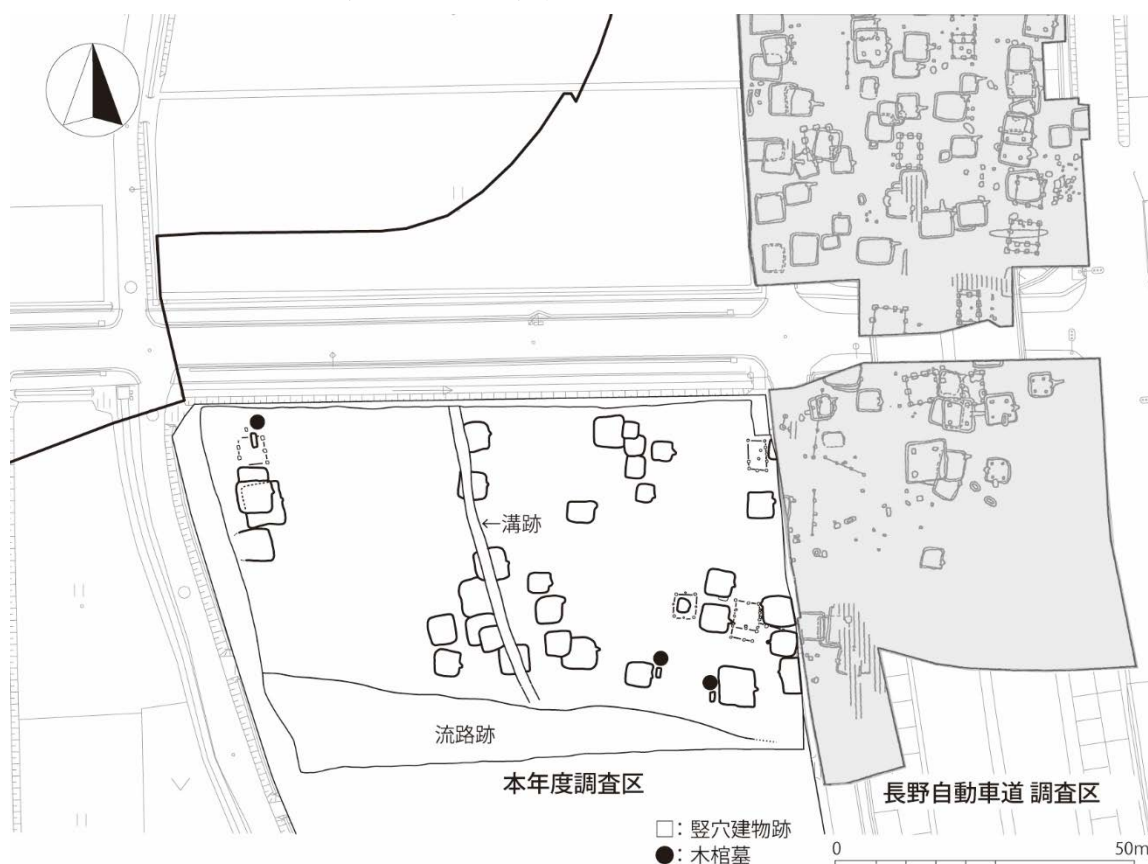


図4 南栗遺跡 主要遺構配置図



図5 調査区全景（南方上空より臨む。写真右は長野自動車道）

調査では事前に主な課題を2点設定しました。長野自動車道調査区の西側における遺構の広がりや集落の南限を捉えることです。

調査の結果、調査区のほぼ全域に奈良・平安時代の遺構が分布し、長野自動車道調査区より西側に遺構は広がることが判明しました。一方南側は、本年度調査区の南端で確認された流路跡が集落の南限と推定されます。この流路跡は長野道調査区の南端で、遺構がなくなる位置と一ほぼ致します。さらに、北側と西側の調査区外にも遺構は広がることがうかがえました（図4・5）。

本年度調査区で確認された竪穴建物跡の時期は、8世紀中葉～10世紀後葉と推定されます。遺構配置をみると、遺構の集中域と空白域があり、中には、竪穴建物跡が5～6軒重複する場所も確認されました。南栗遺跡の集落には遺構集中域と空白域があることは、長野自動車道調査区でもみられたことです。

(2) 奈良時代の大型竪穴建物跡

34軒確認された竪穴建物跡は、比較的規模の大きい建物跡が時代的に古い傾向がみられました。一辺7mを測り、柱痕跡が残る柱穴が6基存在する竪穴建物跡は、8世紀に構築されていま



図6 奈良時代の竪穴建物跡



図7 奈良時代と推定される掘立柱建物跡

す（図6）。さらに掘方が方形を呈する側柱の掘立柱建物跡が確認されました（図7）。出土遺物が少なく詳細な時期は不明ですが、大型竪穴建物跡と主軸が一致することから奈良時代と推定でき、上記の遺構はセットになると推定されます。

(3) 平安時代の木棺墓（図8～10）

平安時代の遺構では、木棺墓3基（SK02・11・12）の発見が注目されます。

木棺墓の形状は長方形で、長辺は南北方向を向いています。木棺の木質部は残っていませんでしたが、3基とも木棺の範囲が確認されました。規模は掘方（木棺を埋設するための穴）が長辺2.1m、短辺0.8m、木棺の範囲が長辺1.8m、短辺0.5～0.6mを測ります。すべての木棺墓から骨（歯）が出土し、その出土位置から、頭部を北に置き埋葬されたことが判明しました。また、2基の木棺墓（SK02・11）からは副葬品が出土しました。SK11では木棺外に灰釉陶器の小瓶2個が並置され、SK02では木棺外に灰釉陶器の碗2点と皿2点、内黒土器の碗1点をまとめて副葬され、灰釉陶器の碗の内側に土師器小皿が逆位の状態で確認されました。食器の中には供物などを入れた可能性があります。なお、木棺墓の時期は、SK11が9世紀後葉、SK02が10世紀後葉で、SK12は出土遺物が少ないため、詳細な時期は不明です。

(4) 調査区を縦断する溝跡

調査区の中央部で発見された溝跡は、調査区を南北に縦断し、調査区外に延びています。幅1.6m、深さ1.8mを測る大規模な溝跡です。断面形は逆台形を呈し、城館の堀跡によく似ていま



図8 平安時代の木棺墓（SK02）



図9 木棺墓に副葬された土器（SK02）



図10 木棺墓に副葬された土器（SK11）

す。この溝跡は奈良・平安時代の竪穴建物跡が埋没後に構築されています。埋土の出土遺物からは平安時代以降としか把握できませんが、南栗遺跡が所在する島立地区には、新村・島立条里的遺構が分布しており、両遺構の遺跡範囲は重なる場所があります。そのため、確認された溝跡は、「条里」と関係する可能性も出てきました。遺構の性格は、来年度以降の調査成果を待って判断したいと考えています。

5 今後の課題

松本 JCT 建設に伴う南栗遺跡の発掘調査は、本年度開始したばかりです。調査の進行に伴い松本 JCT 用地内における集落構造を明らかにし、過去の調査資料と合わせることで、遺跡全体の実態をより解明したいと考えています。

引用・参考文献

松本市教育委員会ほか 1984 『松本市島立南栗遺跡－緊急発掘調査報告書－』

長野県埋蔵文化財センターほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 7－松本市内 その 4－ 南栗遺跡』